

責任ある女は涙流さない



53年生まれ。日本代表選手では内野手で活躍。実業団で女性初の監督となり、日本代表監督に。99年に結婚。著書に「宇津木魂」など。

うつぎ 宇津木 妙子さん たえこ

元女子ソフトボール
日本代表監督

私は、人前で泣くことはほとんどありません。特に監督という立場になってからは、強い自分を意識して装っていました。組織の上に立つ人間は弱いところを見せられない。責任を負うリーダーは、それくらいの覚悟が必要でしょう。

昔、日本代表の男性監督が泣きながら選手たちにごう言いました。「俺がおまえたちのために頑張っているのに、理解しているのはマネジャーだけだ」。

選手だった私は「何言ってるんだ」と思いましたね。

本来、涙は人の心を動かすものです。でも、あの涙には共感できない。なぜなら、監督は自分を正当化しているんですよね。周囲に分かってもらえず、悔しくて涙を流す。分らないでもないが、その人の力不足でもある。厳しく言えば、泣くのは逃げなんです。

昨年、経済産業相だった海江田万里さんが国会で泣きました

よね。原発対応などで思い通りにならない状況だったんでしょ。うが、トップの人間が仕事の場で感情にまかせて泣くべきではないと思いました。

男性の印象深い涙は、父の涙です。引退してから実業団の監督を要請され、父に相談しました。そのときに高校時代にいじめを受けたことや、上下関係の厳しい実業団の寮生活などを初めて話しました。父は「そんなに苦労したのか」と激しく泣きました。実は内心、「なんで男のくせに」と思ったんです。でも時間が経って今思うのは、娘が歩んできた人生に思いを寄せたの涙だったのでしょ。

2008年北京五輪で日本が金メダルを取り、テレビ解説で現地に行った私は人目もはばからず泣きました。「鬼も泣くんぞ泣きまじ」と冷やかされましたが、00年シドニー、04年アテネ五輪で

監督として指導した教え子の快挙に心から感動したんです。

家族や恩師、組織の仲間など、自分を支えてくれたり、共に苦労したりした人たちへの感謝や称賛、いたわる気持ちから出てくる涙はいい。それには、他者を大事に思う優しさがあるでしょう。だから、鈴木宗男さんが苦労をかけた家族のことを思って泣くのは理解できます。

本当は私、1人で泣くことは多い。日本は男性社会ですから女性監督への風当たりは強く、よく批判も受けました。悔しくて泣きたくなると、走りにいきました。涙は風が自然に拭いてくれます。そうやって、いろんな思いも流します。泣きたいけれど、見せない。努めてそうするのはすごく孤独です。

北京五輪でエースだった上野由岐子や、中国から国籍を変えて日本代表になった宇津木麗華も、人前で涙を流さなかった。ぐっと耐える根性がある。めそめそする男を見ると、もっとしっかりやれよと言いたいですね。

(聞き手・金重秀幸)